

つまり、川原に連れて行かれ、間一髪のところ、粥塚隊長と水谷通訳のお陰で命を助けてもらった。そのときの粥塚隊長から「自らの墓穴を掘るようなことはするな」と注意を受けた言葉は、私の生涯の戒めとして現在も生きているし、私のために必死で通訳してくださった水谷氏も今は故人となられてしまったが、心より御礼申し上げ、御冥福をお祈りいたします。

やがてソ連政治局の指導により若いアクチーブがやってくる、訳のわからないような「唯物論」や何やらが始まって民主主義革命ののろしが上がった。反軍闘争からインテリゲンチアまでつるし上げになった、日本人同胞が互いに血で血を洗う陰惨な闘争が日夜繰り返された。私にはどうしても心底より共産主義思想に同調できなかった。しかし表面上はあくまでも共産主義者でなければ帰国できなかった。

昭和二十三年十月二十日、スターリン元帥に感謝決議と、天皇島に敵前上陸し日本に民主的の革命を起こすのだと言う口実で引揚船「朝嵐丸」に乗船することができた。

朝嵐丸での給食は白い米飯とたくあんだった。三年余り口にしたことのない日本の味だった。「国破れて山河あり」とか。まだ祖国は健在である、きつと再建できると心に誓った。

故郷の家ではすでに両親は他界したのだし、一人婚期を逸した姉が家を守っていてくれるだろうか、二人の弟は無事帰還できただろうか、いろいろと思いをめぐらして涙が止めどもなく流れ、舞鶴港の松の緑が目にしみる八年ぶりで見る祖国の土、今踏むことができる喜びと感激の涙だったのだろうか。

## 私のシベリア抑留記

岐阜県 猿渡 秀夫

昭和十九年八月、静岡県浜松市外三方原、中部第一三〇部隊入隊。

昭和二十年一月、第一期検閲終了。一月十五日、北支派遣軍一九一五四部隊に派遣されることになる。二

十六日下関到着、翌日乗船する。対馬海峡に中国潜水艦出るとの報に戦争を実感するも、無事釜山港に到着。釜山駅より鉄道により陸路を北上、二月十五日、北支濟南飛行場に到着、任務につく。

各地からの通信受領が主な仕事であった。各方面より戦況の情報が入ってくるが、皆、日本にとって不利な情報ばかりになった。戦況はだんだんと悪い方向に進んでいるようで、部外への秘密がやかましく言われるようになった。

沖繩上空での空中戦の模様など刻々と打電してきたが、最後に「我レ敵艦二向ケ突入ス」、これで連絡は切れる。乗員、機体を再び見ることはなかった。この作戦は天号作戦と銘打って、我々第五航空軍部隊が主力戦力であった。

濟南に来てB 29の爆撃二回、P 51の銃撃五回と、慣れてきたときに転進命令があり、朝鮮の平壤（現在のピョンヤン）に移動する。平壤市内の小学校に本部設置し、次に我が佐々木分隊は満州国錦州に展開を命ぜられ移動する。錦州駅より二十キロのところ秘匿飛

行場があり、着いたときには少年飛行兵の教育実修であったが、我々が到着と同時に少年兵は移動していた。

早速防空壕掘りに着手。この村は候家屯というところで、村長さんが大変な協力者で、我々の仕事に村民が奉仕で約三十人の満人が来たが、何せ仕事の能率ときたら日本人の十分の一人、私が指導して掘っていたが進行しない、半分はあきらめ。彼らにしてみれば全く関係のないこと。満人の村役人は大声をあげて罵声を浴びせているが、どこ吹く風、なんとも言えぬ光景でした。

二十年八月十二日、この飛行場の設備は野戦にしてはよい方でした。送信、受信室も完備している。ただし、敵機の目標になりやすい。そのために約百メートル離れた小山の中腹に穴を掘って移転することである。そんな状況の中に突然の情報が入った。どうもアメリカ側の放送で近々日本は全面降伏をするとのことであった。

分隊長も他に口外せぬように全員に注意した。それ

と同時に、北のソ連軍の動きに注意するよう指示がある。

八月十四日、内地からの大本營の放送で重大な天皇のお言葉とのことで、もはや事の重大さを充分感知していた。飛行場の歩兵警備中隊にこのとき初めて通達した。翌日全兵士が我々の準備した受信機で詔勅放送を聞いた。その日の夕食は盛り沢山な食事が出た。

十六日、朝より無線機器の爆砕、暗号書類の焼却を行う。

十七日、送受信所内の片付け。

十八日、錦州市内にて一泊、日本人経営の酒場にて。

十九日、大連展開中の同部隊松井分隊と合流し、錦州駅出発。途中大石橋にて列車停止（六時間）、ソ連軍落下傘部隊奉天市に降下のため列車運行が不可能との情報、迂回して鮮満国境の駅安東に出る。安東駅にて中国人機関士逃亡、汽車停止のまま約八時間、なんとか朝鮮人の機関士を探して朝鮮国内に入り本体と合流する。

二十一日、週番を命ぜられるも、毎日ソ連機が二回

飛来して大同江の横の平壤飛行場の偵察を行い、兵員輸送しているとの情報。

二十二日、大同江川中に全員の銃を投げ込む。

二十三日、朝鮮人の行動が不気味になり、日本の神社が焼かれる。

二十五日、ソ連軍の命により飛行場横の社宅に移る。

二十八日、ソ連軍将校と朝鮮人が日本刀を持って社宅に入り、三十キロ奥の三合里の元日本軍の演習場に集合するよう指示する。

二十九日、先遣隊として約三分の一の六百名が出発する。

三十日、我々が出た一時間後に、銃を持ったソ連と朝鮮人に全員三合里に行けと追い出しにあい、朝全員と顔を合わす。

三十一日、逃亡者十数名出る。

十月二十八日ごろ、ダモイ東京のウソの始まりで、興南港の社宅に移動する。約二カ月、毎日ソ連の貨物船に穀類の積み込み作業。

十二月三十日、第二回目東京ダモイで着いたところ

がウラジオストック。

昭和二十一年一月二日ウラジオストック発（第三回東京タモイ）、沿海に沿って北上、三日目より海一面氷の海を北上する。どこからともなく碎氷船が現れ先導すること約二十時間、港らしき入口で我々の船は止まる。船上から下を見て驚いた。なんと厚さが二メートルもある氷が縦、横、斜めと割れたばかりでまだ付着している上を早くもトラックがこの船に近づいてくる。トラックが氷の上に下ろされ、ソ連兵が銃を持って降りて行く。この港がソフガワニ港の入口で、奥までの距離は十五キロくらい。氷上のデコボコをよけ、滑りながら四時間かけてやっと地面のところに着し、収容所の建物まで雪の中を三十分ほど歩き、やっと着くと建物の中は至るところ氷がついていたが、二十キロ〜二十五キロの装具を背負って氷原を歩いた疲労は死の一步手前だった。横になると皆凍死しないように注意しながら寝た。

途中、ソフガワニ東南地点で友納中尉が行軍中に倒れて凍死された。誠に哀れであった。

この収容所は第二収容所として主に伐採、製材所の作業。到着から十日目、次々死亡し、二十五名が一室に並べられた。

二月に入り同年兵（名古屋出身者）二名が死亡。

一月二十日、奥地伐採地チバリに五百名転出。収容

所内の病室は満員のため、少々のことでは認められぬ。

五月になると、病人は少なくなる。

六月に入ると、ポーンハーヂ（流木）作業、野宿しながら上流へ。

七月〜八月には、今日までの製材品の船積み作業を行う。

九月〜十月、ソフガワニ港の入港船の荷役作業、製粉工場の船から荷役作業。

昭和二十二年六月、火力発電所の石炭荷役に七百名転出。病弱者第三収容所に移動、約五百名。第一チバリ収容所伐採者約七百名全員が凍傷、病気のため下山、第三収容所に入る。

七月、第二収容所の残り千名が岳詰工場（港の入口）に移動。

十月、東京ダモイで第三収容所に移動、乗船、ウラジオストックに上陸。市内収容所よりウラジオ駅乗車、ウオロシロフ駅にて下車。橋之下収容所（第二）に入る。石けん工場の労働、砂糖工場、道路補修、建築現場などの作業。

昭和二十三年、ウオロシロフ地方役所のポイラー係としての作業。

八月、東京ダモイで市内の別の収容所に移動、そこで他の部隊の者と一緒になり、ナホトカに向け汽車に乗りナホトカ着。我々だけ約五時間後、乗ってきた汽車で元のところへ戻るかと思ひしや、ウオロシロフを通過してソ満国境近くの無人駅に降ろされ、十五キロ奥地の山中にある小屋に入る。

十月、前にいた部隊が全員引き揚げ（ダモイ）、我々だけ残り、伐採作業。

昭和二十四年八月、一週に一度四十八時間〜五十六時間という労働が続く。薪を貨車が入ると七、八人が一組で一時間で積む。横にあるものを積むのとわけが違って、五十メートル〜七十メートルと遠いところに

あるものを運搬して積むのである。目方もかなり重いものばかり。一日三度列車が入ると皆完全にふらふらになる。

十月二十二日、突然東京ダモイとソ連兵が言ってきた。皆本気にしないが、荷物を持ってトラックに乗る。小雪が降って寒い夕方だった。駅で待つこと五時間余、こんどはナホトカに着いた。それから五日間毎日待ち続けて、最後の収容所に入ったときはホツとした。車窓から見てソ連兵に聞いた話では、沿線の収容所は皆帰ったという話だった。我々のほかに将校連中がナホトカにいた。

こうしてシベリア抑留は終わった。今思い出しても胸がキリキリ痛む。よくぞ生きて帰れたと時々夢を見る。